

4. 都市づくりの将来像

4-1 まちづくりの理念

本村のまちづくりを進めるにあたり、「まちづくりへの取り組み姿勢」を理念として明確にしておくことが大切です。

地域の現況調査結果や、村民への意向調査の結果などから、本村には、自然や歴史、農林水産業など、本村を特徴づけている良い資源が多くある一方で、買い物や働く場所など、本村での快適な日常生活には足りない機能も見られます。

これからの本村のまちづくりにおいては、「まちづくりの守りの姿勢」として、本村が持っている良い面を守り続けるため、本村の良さである「健康的な生活」に着目し、その反対に「まちづくりの攻めの姿勢」として、本村に足りない面を補うため、本村に不足している「便利な生活」に着目します。

また、本村は行政区域面積や人口規模が比較的小規模な自治体であるため、無理なく的を絞ったまちづくりを進めていくことを基本とすべきです。

このようなことから、本村のまちづくりを行う際の理念は、「今の美浦にある良いものを守り、これからの美浦に足りないものを確保」し、「無理なくまちづくりを継続し続ける」ことで、「村民や来訪者が美浦村を居心地がよい場所と思える」ことにより、「満足度」が高いまちづくりを目指すこととします。

(1) 美浦村にある健康的な暮らしを大切にする

これまで本村が持っている良さであり、これからも大切にしたい要素としては、村民への意向調査結果にも表れているように、霞ヶ浦や山林などの自然、水辺や筑波山などの美しい風景、特徴的な農水産物、陸平貝塚や木原城などの歴史、全国的にも希有な存在である JRA 美浦トレーニングセンターなど、私たちの健康的な暮らしを育む上で、その基礎となる非常に多くの地域資源があります。

しかし、これらの資源はこれまで当たり前存在していましたが、これからもずっとこのままあり続けるとは限らないものでもあります。実際に、霞ヶ浦の水質やごみなど自然環境が少しずつ悪化することや、美しい景観もある日突然作られた大規模な屋外広告物で視界が遮られることもあります。

このように、何もしないことで本村の健康的な暮らしが損なわれることから地域をどうやって守るかを考え、行動に移すことが必要です。

そこで、本村にある健康的な暮らしを大切にするための仕組みとして、「良いものを守るための決まりやルールを作る」ことや、「重要な資源を施設として整備して保護する」ことなどを検討します。

(2) 美浦村にない便利な暮らしを取り込む

これまでの本村のまちづくりにおいて、これからも大切にしたい要素としては、村民への意向調査結果にも表れているように、買い物や通院などの便利さ、まち全体の活気、働く場所、交通施設などの生活基盤など、私たちが不便なく暮らしを営む上で必要な都市的な機能であると見られます。

これらの都市機能は、“ない”または“整備水準が低い”ことによって村民の不便を来すものですから、都市機能を村民が利用できるようにするためには、どのような方法があるかを考え、確保することが必要です。

そこで、本村にない便利な暮らしを取り込むための仕組みとして、各種の都市機能について、「周辺資源の活用」や、「村内への導入」などを検討します。

①周辺資源の活用

本村において不自由している都市的な機能については、村民への意向調査結果からも、「〇〇市にはあるのに美浦村にはない」というような指摘がいくつか見られました。もちろん、ありとあらゆる都市機能が村内に存在していれば単に利便性という点では良いことですが、その反面、それを一通り揃えるためのコスト、採算性や周辺都市との競合関係、場所の確保とその開発などによって失われる可能性のある地域の資源、そしてそれらを踏まえた上でのその実施主体の課題など、難しい課題もあります。

しかし、発想を変えて見ると、実はこれらの都市機能は「周辺都市にはある」ため、無理に村内に揃えず、周りにある都市機能を有効に活用することも考えられます。

もちろん、全てを周辺都市に期待するようでは、日常的な買い物や通院さえも不便になりかねないた

め、最小限の都市機能は村内に確保するにしても、一定以上の水準である高次な都市機能については、周辺都市にあるものを有効に使うという考え方です。

このようなことから、既に本村周辺の拠点都市や中都市に既にある都市的機能については、無理に村内への導入を図らず、それを活用する姿勢を明確にしていくこととします。

②村内への導入

上記のように周辺の都市機能を有効に活用するとしても、村民の身近にあるべき最低限の機能については、村内に導入することが必要です。一例として、日常的な食料品などの身近な買い物、義務教育を中心とする育児・教育施設、高度救急医療以外の総合病院や診療所など、村民が日常生活において頻繁に利用する都市機能については、引き続き村内に確保することを基本とします。

ただし、これらの日常的な都市機能についても、むやみに村内に分散させるのではなく、一定の集積を図ることで、効率的な土地利用の実現や、集積効果を生むことが望まれます。

(3) 無理なく的を絞ったまちづくりを行う

本村は、大都市や拠点都市と比べると行政区域面積や人口規模が小規模な自治体であるため、都市規模に応じて明確に的を絞ってまちづくり施策を展開することが基本であると見られます。

ただし、小規模な自治体であっても、まちづくりの施策展開が不充分であることや、進捗が非常に遅いようでは、村民の満足が得られません。一方、都市規模に不釣り合いな非常に大がかりな施策展開を頻繁に行うのでは、継続性や持続性に課題が生じる可能性があります。

そこで、本村は小さな村であることから同時進行であれこれ無理な展開はせず、まちづくりの施策の優先度を明確にして効果的な施策を厳選し、着実にまちづくりが進み、結果的に良好な都市環境が作られているまちを目指します。

(4) 満足度の高いまちづくりを大切にする

村民の美浦という場所への想いを見つめてみると「美浦村での暮らしには課題もあるが、とても困るようなことも実はさほど多くない。むしろ、ふと辺りを見回してみると、美しい風景や恵みの多い自然、歴史の風情。なんだ、自分たちは意外と良いところに住んでいるじゃないか。やわらかな“光”と心地良い“風”が吹く“丘”、それが美浦村の自慢なんだ」と、そんな風に幸せを感じている暮らしぶりがあります。そして、「美浦村」という場所は、その幸せな暮らしをこれからもずっと支える場所であり続けることを願っています。

そこで、本村は、弱点を補って余りある良い所であり、村民の快適な生活を支え、満足度が高い暮らしがある場所であること大切にします。

【美浦村のまちづくりの理念】

(1) 美浦村にある健康的な暮らしを大切にする

(2) 美浦村にない便利な暮らしを取り込む

- ① 周辺資源の活用
- ② 村内への導入

(3) 無理なく的を絞ったまちづくりを行う

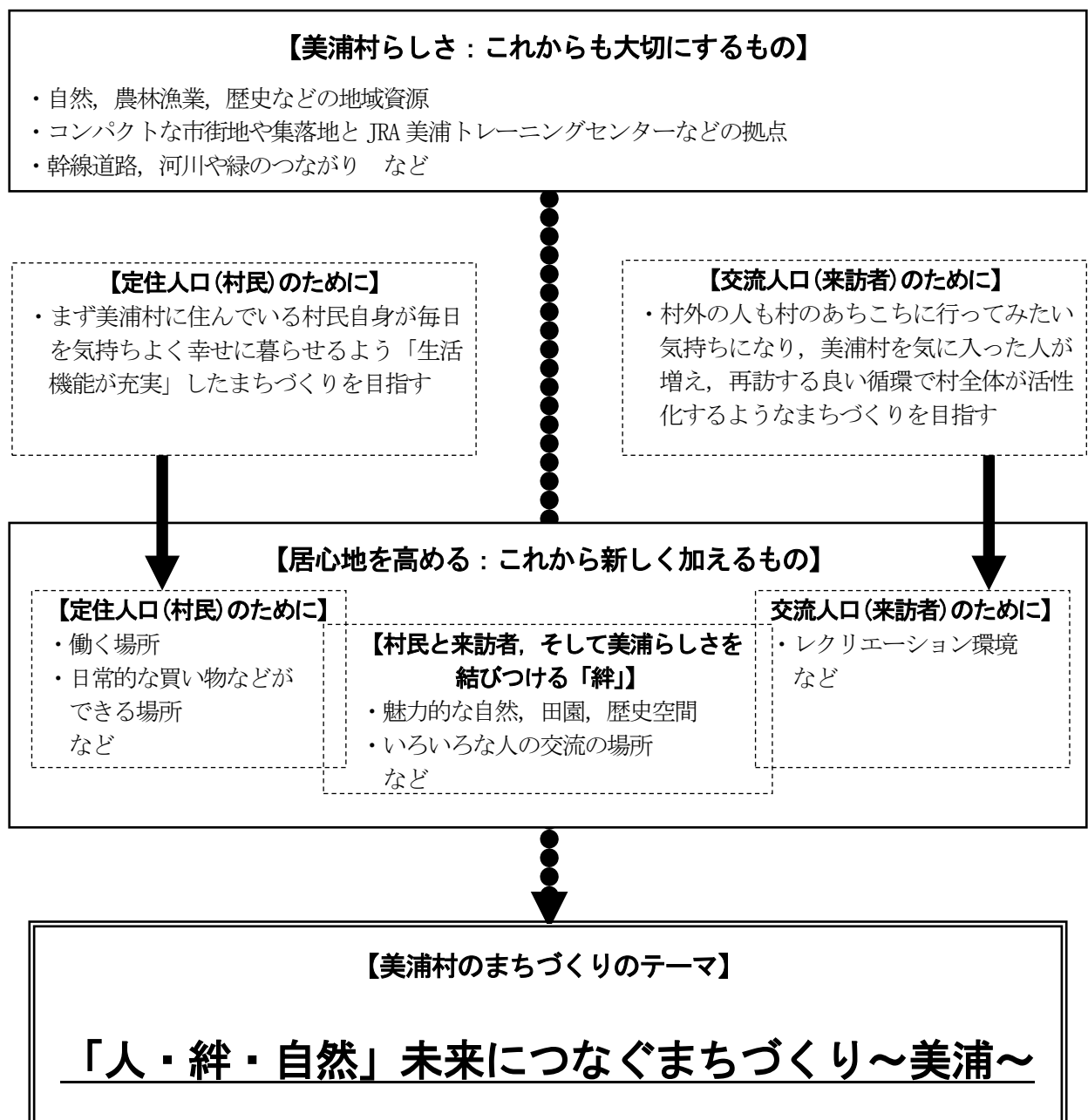
(4) 満足度が高いまちづくりを大切にする

4-2 まちづくりの将来像

本村が目指す将来のまちづくりの姿は、まちづくりの理念に示したように、本村が持っている良い面を守り続けながらも本村に足りない面を補うことで、本村らしさを保ち、高めることによって、村民や来訪者が本村を居心地がいいと感じられるまちづくりを大切にします。

そこで、本村の恵まれた資源である「村民や来訪者：人」と「霞ヶ浦や山林や農地：自然」に着目し、それを「結びつける：絆」によって、「美浦村らしさ」として未来まで保ち続け、つないでいくまちづくりを目指すこととします。

- ・霞ヶ浦や筑波山を遠景に配し、本村らしい魅力として自然・農漁業・歴史の香りのする地域資源やコンパクトな拠点・施設が村内にちりばめられている姿
- ・資源や拠点・施設が幹線道路や河川や緑の軸などを使った快適なルートや小径で結ばれ、村民も来訪者もつい散歩したくなるような姿
- ・周辺都市の資源を活用することも含めて、働く場所や買い物などの生活の便利さが新しく加わった姿
- ・田園地帯であることが必ずしもマイナスイメージではない前向きな田舎の姿
- ・このような居心地のいいまちにいたいこと自体が村民や来訪者は幸福と感じて満足している姿



4-3 まちづくりの目標

(1) まちづくりの方針

本村が目指すまちづくりを実現するために重点的に取り組むことをまちづくりの方針として整理します。

①骨格的交通軸の整備と市街地・拠点の連絡（道すじを創る）

幹線道路による骨格的な交通軸を整えます。また、この交通軸によって、その軸沿いに配置する市街地や拠点を連絡します。

- ・ 幹線道路は安全で快適に周辺の拠点都市などに移動できるようにします
- ・ 市街地や拠点はお互いが行き来しやすくします
- ・ 市街地や拠点は活気があって快適に生活できるようにします
- ・ 多くの人が通る幹線道路沿いは美しい風景にします

②霞ヶ浦・河川による水辺ネットワークの整備（水すじを守る）

本村の行政区域境の多くを占めている霞ヶ浦湖岸の水際線や村内に張り巡らされている河川・水路などによって形成されている水辺のネットワークを整備します。また、この水辺付近にある水田などの農地、景観を保全します。

- ・ 本村にあってほかにない美しい水辺は大切にします
- ・ 自然の恵みを育む農地や湖は村の財産として大切にします
- ・ 見映えと共に安全性や効率性も高めます

③樹林地や農地などの緑のベルトの保全（山すじを誇る）

帯状につながる斜面地のほか、丘陵地に残る樹林地、寺社周辺の樹林、屋敷林などの分散する緑地を結ぶ緑のベルトを整備します。また、農地や歴史的資源など緑の資源と相性の良いものをつないで集落や田園景観を高めます。

- ・ 美しい景観の重要な要素である斜面林、集落、屋敷林、農地を守ります
- ・ 古来より続く伝統的な歴史風土を受け継ぎ保全します
- ・ 農村集落の生活環境を整えて地域活力を維持します

④軸が交わる場所を活かした交流・活性化の促進（すじの交わるつじを活かす）

骨格的交通軸、水辺ネットワーク、緑のベルトが交差する場所は、美浦らしい資源が交わる“辻”として、さまざまな人の集積を活かし、交流や地域活性化の契機となる場所として大切にします。

- ・ 複数の種類のすじが交わるつじは特に重点的に整備します
- ・ すじを流れる人、産物、文化、資金、資源などをつじ付近に滞留させます
- ・ つじから発信する新しい文化と活力を周辺にも波及させます

(2) まちづくりの目標

まちづくりの基本的指標となる本村の将来人口を目標として定めます。

①目標年次

一般的に都市計画においては、長期的な視点から都市の整備を行うことが必要であるため、基本的な目標年次をおおむね20年後とすることが多く、本計画がこれに当てはめると平成43年となります。

また、本計画の上位計画である茨城県が策定している本村を含む稲敷東部台都市計画区域の整備、開発及び保全の方針(都市計画区域マスタープラン)では、基準年を平成17年、目標年次を平成27年としており、5年毎に計画の見直しを行っていることから、本計画との関係では平成42年が節目となります。

このような状況から、茨城県と本村の都市計画としての整合を図るため、本計画の目標年次は19年後となる平成42年(2030年)とします。

②将来人口の目標

本村が平成16年3月に策定した第5次総合計画においては、平成25年時点での将来人口の目標を20,000人としていますが、現在は約17,169人(平成23年4月1日時点)にとどまっています。

また、我が国における今後の人口動向に関しては、一層進むと見られる少子高齢化などを踏まえると、今後は、全国的に減少傾向に向かうと見られています。

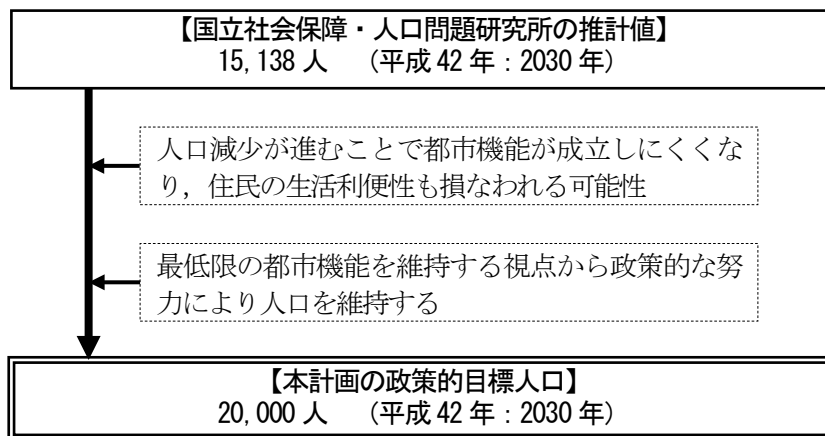
一方、中小都市において人口減少が進むと、人口規模に連動する医療、教育、商業、余暇などのさまざまな都市機能が成立しにくくなり、住民の生活利便性も損なわれる可能性があります。

このため、地域住民にとって最低限の都市機能を維持できるだけの人口を確保する視点から、目標とすべき人口規模を掲げることも重要です。

このようなことを踏まえ、本計画においては、総合計画との整合性や、総合計画の将来像や目標の実現をまちづくりの分野から支援することなどを念頭におき、「政策的目標」として、総合計画の将来人口の目標を踏襲し、20,000人とすることにします。

【美浦村の将来人口の目標】…政策的目標人口
20,000 人 (平成42年：2030年)

【参考資料】「自然趨勢人口の推計値」と「本計画の政策的目標人口」の関係

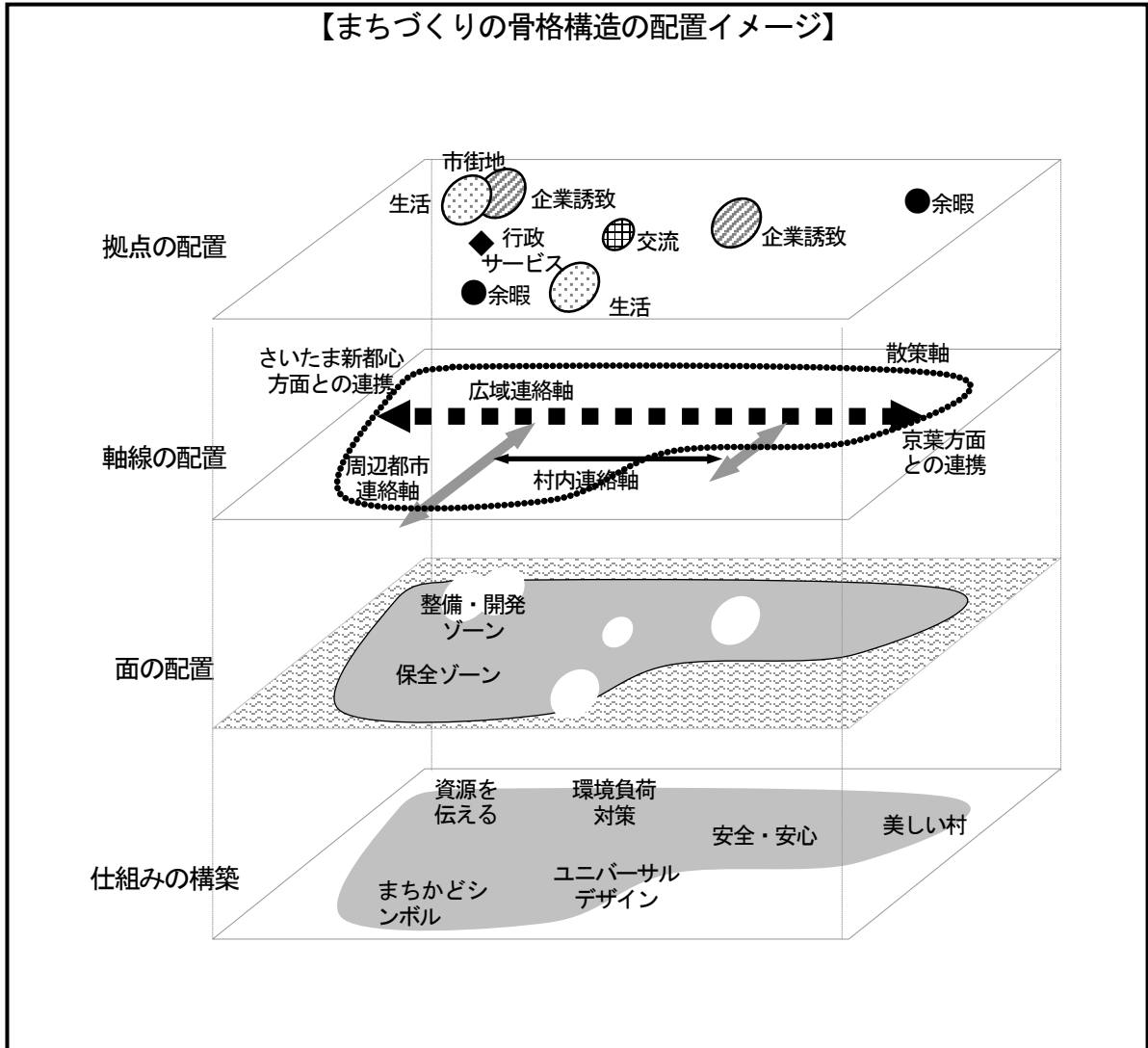


4-4 まちづくりの骨格構造

本村が目指すまちづくりの姿として、将来の骨格的な構造を定めます。

骨格的な構造となる、さまざまな都市機能を持たせる各種の拠点、拠点などを連絡・連携するための軸、土地利用の整備・開発・保全の方向性を定める面について、それぞれの役割や配置する場所などを明らかにします。

さらに、これらの拠点、軸、面をより効果的に作用させるために、まちづくりに関わる仕組みを明らかにします。



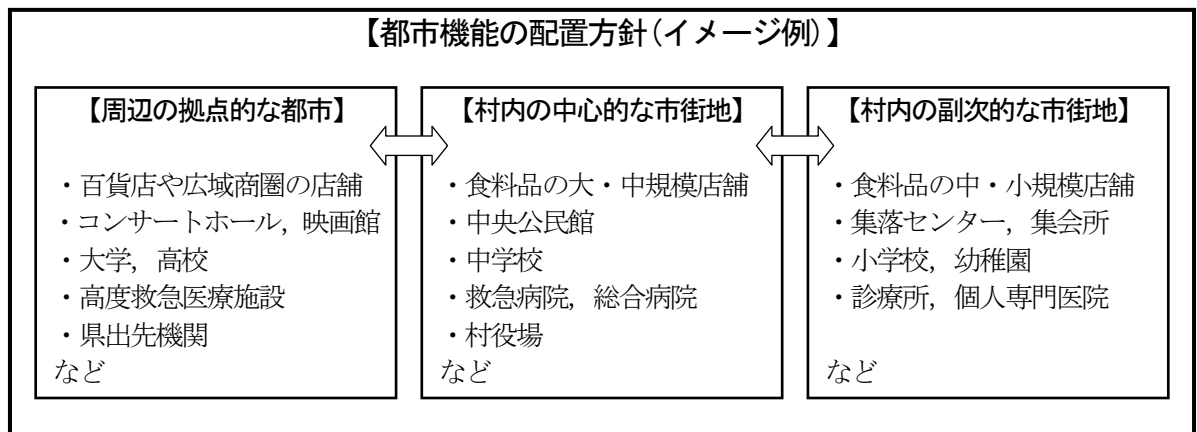
(1) 拠点の配置

本村の都市的な機能として、市街地や拠点地区の役割を明らかにし、適切な場所に配置します。

また、これまで既に定められている拠点について、必要に応じて再構築・見直しを行います。

本村のまちづくりのテーマである「人・絆・自然」未来につなぐまちづくり～美浦～」を実現するためには、それぞれの拠点が魅力的かつ快適であることが重要です。

- ・都市機能の種類の例としては、暮らし（住居系市街地、集落地）、買い物（商業地、中心市街地）、交流・コミュニケーション（交流施設、文化施設）、就業（農地、工場、商店、事務所など）、教育・学習（保育・教育施設、文化施設）、娯楽（商業地、中心市街地、レクリエーション施設、娯楽施設等）、保健・福祉・医療（病院、福祉施設など）などの、多様な機能を配置することとします。ただし、まちづくりの理念に示したように、比較的高次の都市機能については、周辺都市に依存することになります。



①市街地などの配置

- ・都市計画で定める市街化区域を木原地区と美駒地区に配置することとし、住居系市街地を木原地区と美駒地区に、商業系市街地を木原地区に、工業系市街地を木原地区にそれぞれ配置します。
- ・また、新規市街地として、新たに計画的な都市的土地利用を図る地区を位置付けることとします。
- ・新規市街地については、都市計画における市街化区域の設定要件などを勘案し、位置や規模の整合性を図りながら検討します。

②企業等誘致拠点の配置

- ・計画的に一団の都市的土地利用を図る市街地に類する拠点地区として、生産機能を始めとする企業などの立地を促進する企業等誘致拠点を配置します。
- ・企業等誘致拠点を配置する位置については、企業等の生産環境として必要なインフラ（道路、用排水、電力、通信など）との関係、一団の規模が確保できる用地の存在、本村の土地利用などと整合することなどを総合的に勘案して候補地を定めます。

③交流拠点の配置

- ・商業、サービス、娯楽、レクリエーション機能などを集約的に配置することで、村内外の人が集まり、交流を図ることで、賑わいのある拠点とします。
- ・村民だけの需要では成立しにくい商業機能やサービス機能についても、通過交通や来訪者の需要を加算することで成立性を高める効果を期待します。
- ・具体的な機能の例としては、道路交通情報提供、休憩・飲食、農作物等直売、日常的商業、娯楽などの機能を想定します。
- ・交流拠点を配置する位置については、拠点性のある既存の施設との一体性、多くの人が利用しやすい幹線道路との近接性、村域的な地理的中心性などを総合的に勘案して候補地を定めます。

④余暇拠点の配置

- ・交流人口によって村の活性化を図るための観光・レクリエーションなどの余暇活動の拠点とします。
- ・一般的に余暇機能の種類は多岐に渡りますが、本村に導入する内容としては、本村を特徴付けている農業、自然、歴史などと相性の良く、本村の良さを損なわない余暇機能であることを基本とします。
- ・既存の余暇活動の拠点としては、陸平貝塚周辺、木原城跡、木原漁港、安中漁港、JRA 美浦トレーニングセンター広報施設や乗馬苑、光と風の丘公園、ゴルフ場などを位置付けるほか、新たな拠点として農業・自然・歴史に関連する施設などの整備を検討します。
- ・新たな余暇拠点の一例としては、首都圏や周辺の拠点都市における都市住民の自然志向や農業志向とをふまえ、本村の農業・自然資源の存在や首都圏との交通利便性などを活かし、農業体験や農産物直売、滞在型自然派レクリエーションなどが考えられます。
- ・新たな余暇拠点を配置する位置については、関連施設との近接性、首都圏などと連絡する幹線道路との関係性、農業・自然資源に恵まれた地区、一団の面的な土地の確保などを総合的に勘案して候補地を定めます。

⑤行政サービス拠点の配置

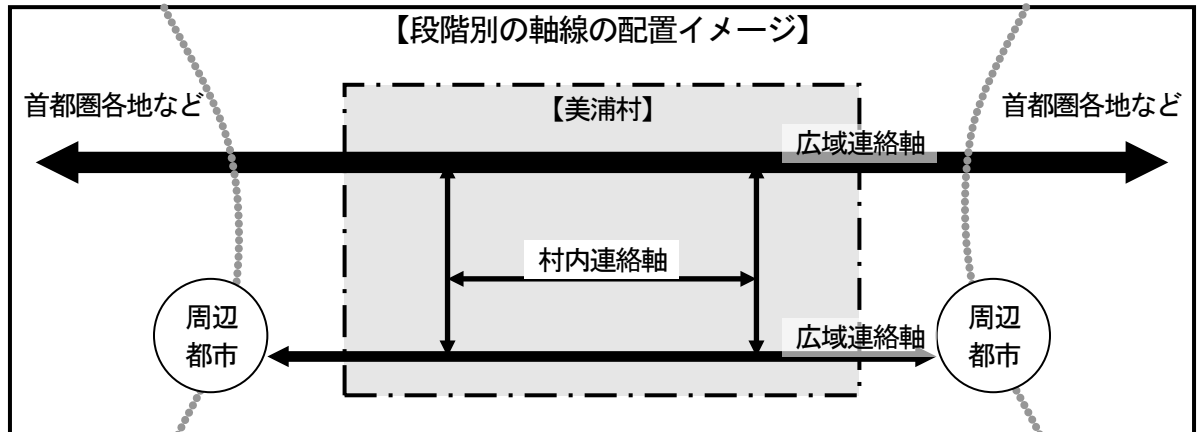
- ・行政による村民サービス、保健・福祉、文化・教養などの拠点として、役場、中央公民館、保健センター、デイサービスセンターなどの施設を中心とする拠点を配置します。
- ・行政サービス拠点は、多くの村民などが利用する場所であるため、村民が行きやすい村の中央部付近であることや、交通利便性が良いことを重視します。
- ・また、さまざまな村民が安心して使いやすい施設であるよう、ユニバーサルデザインの考え方を踏まえたバリアフリーな空間であることを目指します。

⑥生活拠点の配置

- ・村内に分布する主要な集落地や、一団の住宅団地を生活拠点として配置します。
- ・生活拠点では、村民の日常生活の利便性や快適性を高めることを目指し、都市基盤施設の整備や、生活環境の向上を図ります。

(2) 軸線の配置

村内の主要な拠点や周辺都市と連絡するための交通動線として、交通の種別ごとに役割を明らかにし、適切な場所に配置します。本村のまちづくりのテーマである「人・絆・自然」未来につなぐまちづくり～美浦～」を実現するためには、スムーズでわかりやすく移動できることが重要です。



① 広域連絡軸の配置

- ・本村のみならず首都圏などにおける広域的な移動を支える幹線道路の機能を担うものとします。
- ・多様な目的の交通が多く集中する道路になるため、特に安全・円滑な交通を処理する道路として道路機能を高めます。

② 周辺都市連絡軸の配置

- ・周辺都市にある都市機能を活用するためにも、周辺都市とスムーズに行き来できるように幹線道路を整備します。
- ・村民の主な通勤先であるつくば市、土浦市、阿見町、牛久市方面への円滑な交通を確保します。
- ・村民の主な買い物や娯楽の場であるつくば市、土浦市、阿見町、牛久市、稲敷市方面への円滑な交通を確保します。
- ・周辺都市だけでなく、より広域的な移動も円滑にするためには、鉄道駅、圏央道 IC、成田空港などの広域的な交通結節点への円滑な交通も確保します。
- ・広域連絡軸と同様に多様な目的の交通が多く集中する道路である場合には、特に安全・円滑な交通を処理する道路として道路機能を高めます。

③ 村内連絡軸の配置

- ・既に美浦にある拠点的な機能や、新たに導入する機能を村民が利用しやすいように、村内の拠点や拠点的な機能が集積する市街地などを結ぶ幹線道路を整備することにします。
- ・また、広域連絡軸や周辺都市連絡軸と村内の拠点的な地区などを連絡する役割も担います。
- ・そのほか、広域連絡軸や周辺都市連絡軸を補う目的で、それらの道路同士を連絡する役割も担います。

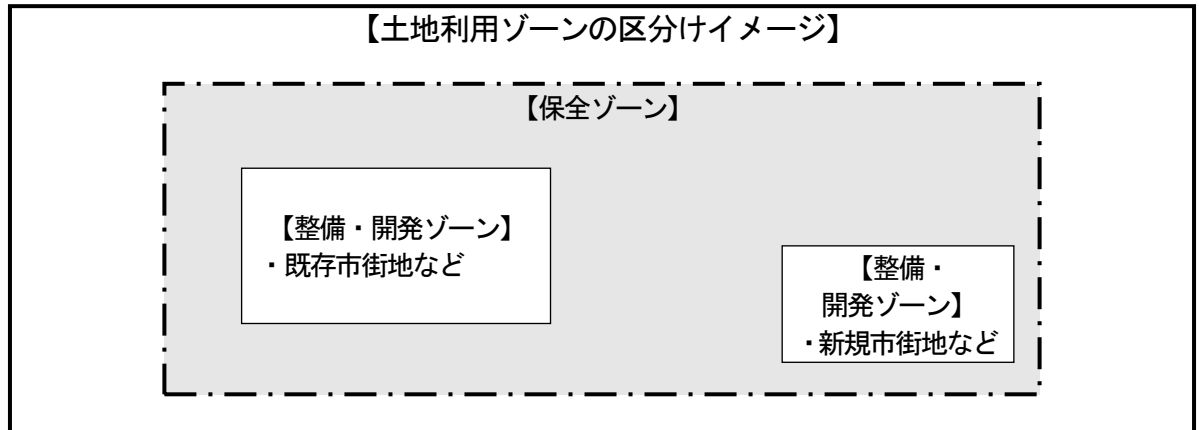
④ 散策軸の配置

- ・霞ヶ浦湖岸、河川、水路などによる水のベルトや、斜面緑地、屋敷林、社寺林などによる緑のベルトで村内のつながりをつくります。
- ・村内に分散する歴史資源、レクリエーション拠点、公園などを水と緑のベルトでつなぐことで散策軸とし、ウォーキングや散策、サイクリングなどの余暇活動や健康づくりのほか、災害発生時の避難路としても活用します。
- ・休息などが可能な小規模広場などを一定区間毎に配置することが望まれます。

(3) 面の配置

本村の良さを守る「保全ゾーン」と、本村に足りない機能を導入する「整備・開発ゾーン」を区分けします。

本村のまちづくりのテーマである「人・絆・自然」未来につなぐまちづくり～美浦～を実現するためには、村全体の土地利用のあり方について、都市的な快適性と農村的な環境の双方とも尊重するようきちんとした区分による方針付けを行うことが重要です。



①保全ゾーン

- ・保全ゾーンでは、本村らしさを特徴付けている田園環境を積極的に保全します。
- ・農地については、霞ヶ浦沿いの大規模な水田は首都圏などの食料生産基地として非常に重要な優良農地であり、台地部の畑は多品種の野菜などを生産する貴重な農地であることから、これらの一団の農地を保全します。
- ・台地と低地の境にある斜面緑地については、多様な動植物の生育環境であり、環境面からは二酸化炭素を吸収する貴重な資源であるほか、本村の景観を特徴付けている良好な資源でもあることから、一団の斜面緑地を保全します。

②整備・開発ゾーン

- ・整備・開発ゾーンでは、村民の生活を高め、本村の活力を維持・向上させるために積極的に整備・開発を行います。
- ・整備・開発の展開については、できるだけ少ない投資で大きな効果を生むためにも、整備・開発の機能はできるだけ分散させずに集約的に配置することにします。
- ・集約的に配置することから、既存の市街地を活用することを基本としつつ、既存の市街地との役割分担を明確にしながら、これまで以上に本村を活性化させるために新たな市街地を確保することとします。

(4) 仕組みの構築

拠点、軸、面などの骨格が、より効果的に機能するよう、まちづくりに関わる仕組みを構築します。本村のまちづくりのテーマである「人・絆・自然」未来につなぐまちづくり～美浦～を実現するためには、ハードをより活かすためのソフト面での工夫や、身近で小さな取り組みも重要です。

①美しいむらづくり

- ・霞ヶ浦や清明川のほか斜面樹林地や寺社林などの多くの緑地などの豊かな自然資源、水田や畑地に加えて屋敷林と一体で形成されている集落地などの農村資源、陸平貝塚や木原城跡などの歴史的・文化的資源、JRA 美浦トレーニングセンターや光と風の丘公園などの市街地や建築物などの都市的資源など、村内の多様な景観特性があることから、これらの資源を活かし、良好な市街地景観を形成します。
- ・本村のまちづくりのテーマである『美浦っぽくて「気持ちいい田舎暮らし」のまちづくり』を実現するためには、村全域が必ず美しいこと（荒れていない、見苦しい要素がないなど）が重要です。

②まちかどシンボルの配置

- ・景観的なアクセントとなり、地域の特徴付けになると同時にまちの目印としても役立つ「まちかどシンボル」を配置することを検討します。
- ・具体的な方法として、景観地や村の入口などにデザインされたモニュメントを配置することや、主要な交差点部などに小規模なまちかど広場となるポケットパークを配置することが考えられます。
- ・モニュメントや案内表示のデザインの例としては、光と風の丘公園内の案内表示のように、本村の特徴を表現する馬をモチーフにすることなどが考えられます。

③資源を伝える仕組みの構築

- ・一例として、道ばたに石がひとつ置いてあっても、だれも関心を持ちませんが、博物館できちんとしたケースに陳列され、その石の云われやまつわるエピソード、秘められた性質などの説明が加わることで大きな関心を持たれます。
- ・まちづくりにおいても、潜在的に良い資源がきちんとした魅力ある資源として注目されるために、こざいいに整え、サイン、説明、そして説明する人の存在（案内人）などが重要です。

④安全・安心の向上

- ・本村は、首都圏に近接しており、首都直下型地震による影響が予想されるうえ、湖沼、河川、斜面地などの多様な地形条件を有することから、多様な災害による被害が発生する可能性があります。
- ・そこで、安全で安心な都市生活を実現するため、災害に対する安全性を向上させることとします。

⑤ユニバーサルデザイン

- ・本格的な少子高齢化が進んでいる中で、村民の定住を促進するためにも、様々な世代が快適に生活できるよう、道路や公園などの都市基盤施設整備に際しては、ユニバーサルデザインの視点からすべての人にできるだけやさしいまちづくりとすることを目指します。

⑥環境負荷対策

- ・地球規模で進む環境問題に対して、二酸化炭素排出量の低減など、さまざまな取り組みが行われており、まちづくりにおいてもその積極的な支援が求められています。
- ・このため、本村のまちづくりでもできるだけ二酸化炭素を削減できるよう、工夫を行うこととします。

まちづくりの将来イメージ

- 凡 例
- | | |
|--|----------|
| | 住居系市街地 |
| | 工業系市街地 |
| | その他の市街地 |
| | 主な産業導入拠点 |
| | 交流拠点 |
| | 主な余暇拠点 |
| | 広域連携軸 |
| | 周辺都市連携軸 |
| | 村内連携軸 |
| | 散策軸 |

